

ローカル鉄道×クラフトビール

「新たな観光コンテンツと地域の連携」

第4弾は、東北のローカル鉄道と、沿線の観光コンテンツ・クラフトビールブルワリーの取り組みを、七十七銀行に紹介していただきます。



アニメ「政宗ダテニクル」のラッピング電車



やながわ希望の森公園入口まで走るミニSL「さくら1号」

観光資源としてのローカル鉄道「阿武隈急行線」

「ローカル鉄道」に明確な定義はないが、仮に中小の民間鉄道（JR線を除く）とすると、国内126事業者が年間で延べ16億人を輸送しており、近年では、国内外の観光需要を背景に、インバウンドの好調な大都市圏のみならず、バラツキはあるものの地方圏でも徐々に乗客を増やしつつある。

東北地方は東日本大震災の後遺症などから観光客入込の回復が遅れていたが、震災復興により再生した新しい街並みやインバウンドの地方波及などが追い風となり、当地方のローカル線も需要拡大の好機を迎えている。

そんな東北のゲートウェイ・仙台市から最も近いローカル線（仙台空港アクセス鉄道を除く）が、昨年（2018年）、創業30周年を迎えた阿武隈急行線である。

槻木駅（宮城県柴田町）から福島駅（福島県福島市）までの全長54.9kmの路線は東北内では屈指の沿線人口を誇り、定期客割合が6割程度を占めるなどおもに「地域の足」として走り続けてきたが、沿線は観光資源の魅力にも溢れている。

例えば、やながわ希望の森公園前駅（福島県伊達市）を下車すると、ミニSL列車「さくら1号」が黒煙を上げながら公園入口まで走る姿を、休日限定ながら見ることも（乗車も）できる。SL列車はどの路線でも臨時便が即完売となるほどの人気を誇っており、小さくとも本物の蒸気機関車は小さな子供連れのファミリーが楽しむにはうってつけである。

また、保原駅（同市）を出ると、震災後に福島県三春

町の廃校をリノベーションして制作スタジオ・ミュージアムを設立した（株）福島ガイナックスが手掛け、戦国武将・伊達政宗をモチーフにしたアニメ「政宗ダテニクル」ののぼりが立つが、ラッピング電車や関連イベントなどが国内のみならずアジア各国からも熱狂的なファンを集めている。

車窓の風景でも、福島と宮城の県境付近では阿武隈川の清流が山際を縫うように流れ、冬は水墨画、夏は水彩画を彷彿とさせる、幽玄な山水の風景を楽しむことができる。

「地ビール」から「クラフトビール」への地道な歩み

その中でも、沿線屈指のキラコンコンテンツが、角田駅（宮城県角田市）近隣で地元農協が長年にわたり手塩にかけて育ててきた逸品「仙南クラフトビール」である。

角田市は、人口当たりの製造品出荷額等が県内第3位を誇る県南最大の工業都市で、人口3万人のコンパクトな市街地には高層建築物が少なく、天高く広がる青い空にメタルカラーの工場が映える爽やかな寒色系の街並みを形成しているが、中心部にある角田駅を下車して



中世ヨーロッパをモチーフにしたレンガ造りの
「仙南シンケンファクトリー」

界では歴史のあるブルワリーである。

今でこそ脚光を浴びるクラフトビールであるが、1994(平成6)年の規制緩和後、小規模なビール醸造会社が林立して「地ビール」ブームを巻き起こしたのも束の間、醸造技術の未熟さや製造コストの高さなどから「観光地によくある高くてもまずいビール」などと揶揄され、業界には淘汰と苦悩の日々が続いた。

そんな逆風下、当所は決して奇策に走らず、東北地方の同業者との共同研究や品評会などを通じて、醸造に最適な温度や湿度、時間など細かな条件を模索する試行錯誤や切磋琢磨を重ね、地道に品質向上の道を歩み続けたのであった。

やがて、改善を重ねてきた地ビールへの評価は風向きが変わってきた。高い対価の支払いも厭われないほど業界全体として品質を向上させた「地ビール」は、いつしか「職人の作る工芸品(=craft)」という喻えを冠するほどの好評を博するに至り、当所の出荷量も年々増加していった。

駅西側を線路沿いに5分ほど歩くと、忽然として暖色系が鮮やかなコントラストを描くレンガ造りに出くわす。中世ヨーロッパを体現したこの建築物こそ、「地ビール」を「クラフトビール」へと昇華する地道な歩みを続けてきた「仙南シンケンファクトリー」(以下「当所」)だ。

当所は地場の農協・JAみやぎ仙南が、1997(平成9)年にビールの醸造を開始した、業

当所の取り組みは次第に、地場農協が営むブルワリーらしく地元産の原材料使用や地域活性化へと向かっていく。例えば、原材料の大麦に、寒冷地でも生産可能なため東北地方でも栽培され、ビール醸造に優れた適性を有する「小春二条」を使用するなど、地産地消の拡大にも寄与している。

また、東北楽天ゴールデンイーグルスとのコラボ企画として、スタジアムで東北各県の事業者とともに看板のクラフトビールを販売したほか、各地のイベントにも足しげく出店するなど、普及拡大と知名度向上にも注力した。

地域と連携したマイルドなイノベーション

2018年には、東北財務局が音頭を取って沿線自治体や大学、地元金融機関が参加する「阿武隈急行沿線地域活性化フォーラム」が、当所と電車内でビールを飲む名物イベントを長年続けてきた阿武隈急行をつなぎ、クラウドファン

ディングでの資金調達や、同年の酒税法改正に伴いビールの副原料に使用可能となった蜂蜜を加えた「はちみつビール」の開発を行う地域活性化策「阿武急ビールプロジェクト」を立ち上げるに至った。

当プロジェクトでは、地元金融機関の



地元関係者によるプロジェクトチームが開発した「はちみつビール」

ネットワーク

により当所や地元の養蜂園、酒飯店などが連携して商品開発を行い、地元

クラウドファンディングの組立てやラベルデザインを手掛けるなど地域の力を結集し、甘みが後味の苦みを引き立てる稀有なビールを完成させた。様々な資源が散在しがちな地域経済で、地域金融機関の仲介した新結合がマイルドなイノベーションを生んだ好例と言えるだろう。

一つ残念なのは、コンテストで数々の受賞歴を誇る当所のクラフトビールや、地元産の鶏肉や新鮮な野菜などをふんだんに使用した料理など、そのクオリティをこの紙面で筆舌に尽くすのが困難なことである。

「百聞は一杯に如かず」「一杯飲まずして結構というなかれ」

これ以上は語るも野暮であり、ぜひ直接その舌で確かめて頂くよりほかない。

なお、ビールの美味しい季節、夏休みの行楽シーズンに当所を満喫するためには、自家用車での来場は運転手に余りに酷であり、阿武隈急行利用がベストなのは言うまでもない。

千客万来、風情あるローカル線と長年の努力が凝縮された絶品ビール・グルメが、皆様のご来訪を心待ちにしている。

(文責…七十七サーチ&コンサルティング 田口 庸友)



コンテストで数々の受賞歴を誇る
「仙南クラフトビール」